

論 文

『初学指南』と『三合語録』におけるモンゴル語の特徴

—— 満洲文字表記モンゴル語会話学習書の口語的特徴 ——

Characteristics of Mongolian in “Chu-xue Zhi-nan” and “San-he Yu-lu”

—— Colloquial Features of Mongolian Texts Represented in Manchu Script ——

栗 林 均 (東北大学東北アジア研究センター教授)

斯 欽 巴 図 (東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程)

Hitoshi KURIBAYASHI (Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University)

SECHINBAT (Graduate School of Environmental Studies, Tohoku University)

目 次

はじめに

1. 『tanggu meyen(一百条)』のモンゴル語訳文四種
 - 1.1 『初学指南』
 - 1.2 『三合語録』
 - 1.3 『蒙古翻訳一百条』
 - 1.4 「トド文字一百条」
2. テキストの比較
 - 2.1 テキスト対照『初学指南』と『三合語録』の第5話の一部
 - 2.2 テキスト間の関係について
3. 『三合語録』と「トド文字一百条」の対応
 - 3.1 文法的語尾の対応
 - 3.1.1 名詞格語尾の対応
 - 3.1.2 動詞時制語尾の対応
 - 3.1.3 動詞副動詞語尾の対応
 - 3.2 母音字の対応

ま と め

はじめに

『初学指南』および『三合語録』は、18世紀末から19世紀前半にかけて北京で出版された木版刷りのモンゴル語の口語(会話)学習書である。それらは、いずれも富俊¹⁾の撰によるもので、内容はともに満洲語会話学習書『tanggu meyen(一百条)』のモンゴル語訳である。それらのモンゴル語は、すべて満洲文字で表記された口語会話文であることに大きな特色がある。

両書の底本となった『tanggu meyen(一百条)』は、清朝乾隆帝の時代に編纂されたと考えられる

満洲語口語学習書で、対話形式の満洲語会話文の百話(=百条)からなる。通行本として4冊からなる木版本があるが、「序」「跋」はなく、編者・刊行年の記載はない²⁾。本文は満洲文字によって書かれているが、所々に満洲語の難語の右脇に漢語の訳語が付されているほか、各話の末に漢字で条番号が付されている。その内容は、「満洲語の学習」「文武の勧め」「飲酒・漁色・浪費の戒め」「交友関係」「家庭生活」「処世訓」「人の評判」「病氣見舞い」等々、当時の満洲八旗人の日常生活の様々な場面に及んでいる³⁾。

『初学指南』と『三合語録』は、『tangu meyen(一百条)』のモンゴル語版であるが、各話(条)の順序は大幅に組み換えられ、話(条)の数も新たに2話を加えられて、102話となっている。『初学指南』と『三合語録』は、話(条)の数も順序もまったく同じである。

『初学指南』と『三合語録』の違いは、前者がモンゴル語(満洲文字表記)と白話体漢文の2言語対訳であるのに対して、後者は満洲語、モンゴル語(満洲文字表記)、および白話体漢文の3言語対訳(三合)となっていることである。さらに、両者のモンゴル語は語順はほとんど同じであるが、個々の単語の表記、名詞や動詞の語尾、使用されている語彙等に少なからぬ差異が見られる。白話体漢文も語句に異同がある。

『初学指南』と『三合語録』のモンゴル語(満洲文字表記)は、伝統的なモンゴル文語の綴りとは大きく異なっている。これは、両書がモンゴル語の「口語」の学習を目的としており、当時の「口語」の特徴を反映しているためと考えられるが、そのモンゴル語は、ハルハ方言、チャハル方言、ホルチン方言等、現代のモンゴル語口語と異なる語形や語尾が多く見られる。また、上述のように、『初学指南』と『三合語録』の間でも、互いに異なる語形や語尾が少なくない。それらの語形や語尾はモンゴル語の時代的・地方的な特徴を反映したものであろうか、あるいは口語や翻訳の文体といった何らかの他の特徴を反映したものであろうか、さらに両文献相互のモンゴル語の違いは何に由来するのであろうか。そもそも両文献のモンゴル語を綴っている満洲文字表記は、当時のモンゴル語の発音をそのまま(過不足無く)写しているのであろうか。

W. Grube(1904; 1905; 1911)は、つとに『初学指南』のモンゴル語をローマ字転写し、『三合語録』との表記の異同を示して両者の違いを明らかにしている。またL. J. Nagy(1960)は、『三合語録』と『初学指南』のモンゴル語と現代モンゴル語諸方言との比較から『三合語録』のモンゴル語の基礎となった方言が東部モンゴルの口語である可能性を示している。

筆者らは、『初学指南』と『三合語録』の他に、これまで詳細が報告されていないさらに2種類の『tangu meyen(一百条)』のモンゴル語訳を見ることができた。そのうちのひとつは、トド文字で書かれたオイラート文語訳であるが、これが『初学指南』と『三合語録』の成立に深く関わっていることを確認することができた。

本稿の目的は、『tangu meyen(一百条)』の4種類のモンゴル語訳を紹介し、『初学指南』と『三合語録』とオイラート文語訳一百条の緊密な関係を明らかにし、それによって上に提起した問題を解明するための手掛かりを示すことである。

1. 『tanggu meyen(一百条)』のモンゴル語訳文四種

1. 1 『初学指南』

『初学指南』は、巻上(63丁)、巻下(60丁)の2巻からなる木版本である。「序」「跋」は無いが、表紙に「乾隆甲寅年刊 紹衣堂」とある。乾隆甲寅年は1794年、紹衣堂は富俊の堂号である。さらに「蒙古語多由口授内地殊難其人因輯是編以便初学(モンゴル語は多くの場合口頭で教えられるが、内地では特に教える人が得難い。そこで初めて学ぶ人のためにこの本を編集した)」と刊行の目的が記されている。本文はモンゴル語(満洲文字表記)と白話体漢文の行が交互に対訳の形で並べられている⁴⁾。

1. 2 『三合語録』

『三合語録』は、4冊305丁からなる木版本である。表紙には満洲語、モンゴル文語、漢文併記の表題のほか「道光十年新鑄」「協辦大学士富鑒定」「板藏琉璃廠五雲堂」とある。道光十年は1830年、協辦大学士富は富俊である。本書には、1846年の再版本がある。再版本は、表紙が「道光二十六年重鑄」「板藏琉璃廠炳蔚堂」となっている他、分冊の仕方が4冊から6冊になっただけで、内容はまったく同じである⁵⁾。本体は道光九年(1829)の序(7丁)と本文からなり、満洲語、モンゴル語(満洲文字表記)、白話体漢文が行ごとに並べられた3言語対訳となっている。

本書の成立について、序には次のように記されている(下線は引用者)：

「(満洲の)国が定まって以来、八旗の者は京城で育ち、幼少から漢語を習い、満洲語を話すには学習が必要である。乾隆年間に智信が清語一百条(tanggu meyen manju gisun i bithe)を編纂して旗人に(満洲語を)教えるのに便利になったが、冊数が少なく世間に広まることはできなかった。翻訳科挙ができて、満洲語とモンゴル語の学校が増えた。しかしモンゴル語の翻訳(文章)と口語は同じでないことから、智信の清語百条を満洲語の文のままにモンゴル語に訳し、御前行走正紅旗満洲副都統巴林輔国公額駙德勒克にモンゴル口語の発音に直させた。近年、公務で漢文を用いることが多く、漢文を学ぶ者はますます増加したが、満洲語を学ぶ者は少なくなった。満洲語やモンゴル語を教える教師や学校も少なくなった。書物が無ければ学ぶことができない。我々は皆蒙古旗人なので、これを看過することはできない。以前に書いた満洲語・モンゴル語の書に漢語を付して三合の書として版を起し、後学の助とした。」

これによれば、富俊が『tanggu meyen(一百条)』をそのままモンゴル語に訳し、正紅旗満洲副都統で巴林輔国公の德勒克(デレク)にモンゴル口語の発音に直させた、という⁶⁾。また、これ以前に満洲語とモンゴル語の書があったとも記されているが、これが何を指すかは不明である。

1. 3 『蒙古翻訳一百条』

『蒙古翻訳一百条』は、中国第一歴史档案馆所蔵の『monggo ubaliyambuha tanggu meyen』と題する4冊(各43丁、57丁、48丁、49丁)の写本である⁷⁾。「序」「跋」はなく、著者・成立年は不明。本文は『tanggu meyen(一百条)』の満洲語とモンゴル語の訳が一行ずつ交互に並べられており、モンゴル語はモンゴル文字で綴られた典型的な文語である。各話の配列は、第1～3冊(第1～75話)では『初学指南』、『三合語録』と同じだが、第4冊では異同が大きい。全体にモンゴル語には多くの追加・

削除・訂正の書き込みがあり、草稿の状態のままである。所々に翻訳の日付が記されており、第4冊末尾にある「癸卯閏五月十二日繙訖」の記述は、1903年に翻訳が終了したことを示していると考えられる。

1. 4 「トド文字一百条」

故宮博物院図書館には『蒙古托忒彙集』と題する8冊の写本が蔵されている。これはモンゴル文語・モンゴル口語(満洲文字表記)・トド文字・満洲語・漢語の対照辞典で、第1巻の巻頭に富俊による嘉慶丁巳(1797年)の序が付されている。序に続いて3頁のトド文字の字母表が掲げられ、その後にトド文字で書かれた12頁のテキストが収録されている。これがすなわち『tanggū meyen(一百条)』のオイラート文語訳であり、『初学指南』と『三合語録』の第1話から第7話に相当する(配列順は第4・5・6・7・1・2・3話の順。本稿ではこれを「トド文字一百条」と呼ぶ⁸⁾。

序には、乾隆47(1782)年、軍機大臣らが奏上して京(師)にトド官学を設立し、蒙古八旗がそれぞれ1名ずつの学生子弟を出して特にトド文字を学ばせた、とあることから、このオイラート文語のテキストは当時設立されたトド官学で使用された教科書の一部である可能性がある。

2. テキストの比較

ここでは、「トド文字一百条」のオイラート文語、『三合語録』のモンゴル語(満洲文字表記)、『初学指南』のモンゴル語(満洲文字表記)、『蒙古翻訳一百条』のモンゴル文語をローマ字転写で比較・対照し、その異同のあり方から相互の関係を検討する⁹⁾。テキストは破損が少ないことと、対話形式の内容が分かりやすいことから「トド文字一百条」の第2の条(『初学指南』と『三合語録』の第5話)の最初から、紙数の許す範囲の部分を示す。

2. 1 テキスト対照(『初学指南』と『三合語録』の第5話の一部)

テキストの略字：満＝『三合語録』の満洲語。托＝『蒙古托忒彙集』のオイラート文語(トド文字)。三＝『三合語録』のモンゴル語(満洲文字表記)。初＝『初学指南』のモンゴル語(満洲文字表記)。蒙＝『蒙古翻訳一百条』のモンゴル文語。

テキストの丁付け(頁と裏表、行)は『三合語録』による(以下、同様)。

14a:1

満	age	si inenggidari	ederi	yaburengge.	gemu aibide	genembi.
托	abayai	či ödür büri	öüger	yabu=xudan.	čuq xārān	od=nai.
三	abagai	ci eduri buri	uger	yabu=hudan.	cuk haran	ot=nai.
初	abagai	ci edur buri	eoger	yabu=hudan.	cum ha	oci=na.
蒙	abayai	či edür büri	egüber	yabu=qui anu.	ööm qamiya_a	od=u=mu.
訳	「兄上 貴方は 毎日 ここを通るのは いつもどこへ行くのか。」					

14a:2

満 bithe hūlame genembi. manju bithe hūlambi wakao. inū. ne
 托 bičiq sur=xai od=nai. manju bičiq sur=či bayi=nu. mūn. odō
 三 bicik sur=hai ot=nai. manju bicik sur=ji bai=nao. mun. odo
 初 bicik sur=hai oci=na. manju bicik sur=ci bai=noo. mun. odo
 蒙 bičig ungsi=ju od=u=mui. manju bičig ungsi=mui busu uu. mōn. odu
 訳 「本を学びに行くのだ。」 「満洲語の本を学んでいるのか。」 「そうだ。」 「今

14a:3

満 aici jergi bithe hūlambi. encu bithe akū. damu
 托 yamar jerge bičiq jālγa=ji bayi=nai. öbörö bičiq ūgei. yaqča
 三 yamar jerge bicik jalga=ji bai=nai. ūburu bicik ugei. gakca
 初 yamar jerge bicik jalga=ji bai=na. eore bicik ugei. gakca
 蒙 yaγun-u jerge-yin bičig ungsi=mui. öber_e bičig ūgei yerū
 訳 どのような 本を 教わっているのか。」 「他の 本は ない。ただ

14b:1

満 yasai juleri buyarame gisun. jai manju gisun be
 托 mūn odō kereqle=kū baγa saγa ūge. basa manju ūgeni
 三 mun odo kerekle=ku бага saga uge. basa manju ugeni
 初 mude kerekle=ku бага saga uge. basa manju ugen-i
 蒙 nidūn-ū emūn_e baγ_a saγ_a ūge. jiči manju ūgen-i
 訳 ちょうど今使う 少しばかりの言葉だ。また、『清文

14b:2

満 tacire oyonggo jorin i bithe bi. suwende ginggulere
 托 sur=xu jorilγa tobčiyin bičiq bayi=nai. tandu darumal
 三 sur=hū jorilga tobciyan bicik bai=nai. tandu darumal
 初 sur=hū jorilgan tobciya bicik bai=na. tandu darumal
 蒙 sur=qu čiqula jorilγ_a-yin bičig bui a=mui. tan-dur kičiyenggūyile=kū
 訳 指要』の本だ。」 「あなた達に 楷

14b:3

満 hergen tacibumbio. akūn. te inenggi šun foholon. hergen
 托 ūjūq jālγa=ji bayi=nu. odō ödür axur. ūjūq
 三 ujuk jalga=ji bai=nao. ugei yeo. odo odur ahor. ujuk
 初 ujuk jalga=ji bai=noo. odo edur ahar. ujuk
 蒙 ūsüg surγa=mu uu ūgei ūū. edūge edür naran oqur. ūsüg
 訳 書を 教えているか、(いないか)。」 「今は 日が 短い。 字を

15a:1

満 arara šolo akū. ereci šun sidaraka manggi. hergen
 托 biči=kū čola ūgei. öñēsü ödür urtu bol=u=qsan xoyino. ūjūq
 三 bici=ku culu ugei. oonesu odur urtu bol=o=ksan hoino. ujuk
 初 bici=hu cule ugei. eonese edur urtu bol=san hoina. ujuk
 蒙 biči=kū ǰabsar ūgei. egünče naran urtu bol=u=γsan-u qoyin_a ūsūg
 訳 書く 暇が無い。これから日が長くなった 後で、字を

15a:2

満 arabumbi sere anggala. hono ubaliyambubumbi kai. age
 托 bičiül=güser xarin orčiul= ge=nei bišiü. abayai
 三 biciol=kuser ge=ku bai=tugai. harin orciol= ge=ne bišio. abagai
 初 biciol=huwasar. harin orciol= ge=ne bišio. abagai
 蒙 bičigül=ü=müi keme=kü čü bayituyai qarinču orčiγala=qu bolai. abayai
 訳 書かせる (というだけでなく)、なお 翻訳しろ と言う ではないか。」「兄上、

15a:3

満 bi bithe hūlara jalin. yala uju silgime aibide
 托 bi bičiq ungsi=xu tula. ünēr toloyoi ergi=ǰi xā
 三 bi bicik umsi=hū tula. uner tologai ergi=ji ha
 初 bi bicik ungsi=hū tula. uner tologai ergi=ji ha
 蒙 bi bičig ungsi=qu-yin učir. ūneker toloyai simkü=jū qamiγ_a
 訳 私は本を読む ために、 実際 頭を突っ込んで どこに

15b:1

満 baihanahakū. musei ubai šurdeme fuhali manju taciku
 托 eri=sen ūgei. manai ene oyiro törin. yerü manju surγuuli
 三 eri=ksen ugei. manai ene oiro torin yeru! manju surgūli
 初 eri=sen ugei. man-nai ene oira torin. yuru manju surgūli
 蒙 eri=r_e od=u=γsan ūgei. bidan-u endeki toγurin tong manju surγayuli
 訳 捜してない(か)。 私たちの この 付近には、 全然 満洲語の学校が

15b:2

満 akū. gūnici. sini tacire ba ai hendure. atanggi
 托 ūgei. sana=bala čini sur=xu γajara you kele=kū bui. keǰiyā(!)
 三 ugei. sana=bele. cini sur=hū gajar yeo kele=ku bui. kejiye
 初 ugei. sana=bala cini sur=hū gajara yeo kele=hu bui. kejiye
 蒙 ūgei. sana=bal_a činu sur=qu γajar yambar ögüle=kū bui. keǰiy_e
 訳 ない。思えば、 貴方が学ぶ ところは 何というのか。 いつ

2. 2 テキスト間の関係について

(1) 一見して分かるのは、『蒙古翻訳一百条』のモンゴル語は他の3種類のテキストと比べて語順や使用語彙に相違点が多いことである。ローマ字転写で下線を付した部分がそれである。例：

位置	『三合語録』	『蒙古翻訳一百条』	
14a:2	sur=ji bai=nao	ungsi=mui busu uu	「読んでいるのか」
14b:1	mun odo kerekle=ku	nidün-ü emün_e	「ちょうど今使う」
14b:2-3	darumal ujuk	kičiyenggüyile=kü üsüg	「楷書」
15a:1	culu ugei	ǰabsar ügei	「暇がない」、等々。

4種類のモンゴル語訳文は、同じ満洲語の文に基づいているが、『蒙古翻訳一百条』の訳文は伝統的なモンゴル文語であり、他のテキストと表現や語句の面で違いが大きい。これと他の3種の訳文との間に直接の依存関係を認めることは困難であり、『蒙古翻訳一百条』の訳文は、他のテキストとは別に、独自に制作されたものとみなすことができる。

(2) 注目すべきは、「トド文字一百条」のオイラート文語と『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語の関係である。両テキストを対照すると、語順、使用されている語彙、名詞格語尾および動詞活用語尾の綴りが細部に至るまでほぼ完全に一致あるいは対応していることが分かる。語尾の対応の詳細は後述するが、両者の一致と対応は極めて緊密で、一方が他方に基づいて制作されたとする以外に説明は困難である。

「トド文字一百条」のオイラート文語の語形と語尾のほとんどは、Позднеев(1911)、Krueger(1978-1984)等の辞典、Лувсанбалдан(1975)、サンボドルジ・橋本(2005)、《蒙文和托忒蒙文》(1976)等の文典に記載されていることから、それは一般的なオイラート文語とみなすことができる。オイラート文語を最初に満洲文字で表記して、それを改めてトド文字に戻すことは考えにくい。「トド文字一百条」のオイラート文語に基づいて『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語が制作されたと考えるのが自然であろう。

ただ、両者の間にも若干の語句の増減や、表記の違いが存在する。そうした違いは、制作のいずれかの過程で生じた誤記・誤刻の可能性がある。あるいは「トド文字一百条」に別の異本(写本)が存在した可能性も考えられるが、詳細の解明は今後の課題である。

(3) 「トド文字一百条」、『三合語録』、『初学指南』の3者の関係では、『初学指南』だけが異なる語形・語尾の表記を持つものが少なくない。それらの中には、オイラート文語的表現をモンゴル文語や非オイラート文語的表現に置き換えていると見なされるものが多い。例：

位置	「トド文字一百条」	『三合語録』	『初学指南』
14a:1	čuq	cuk	cum
14a:1	xārān	haran	ha
14a:1	od=nai	ot=nai	oci=na
14a:3	bayi=nai	bai=nai	bai=na
14a:3	öbörö	ūburu	eore
14b:1	mün odö	mun odo	mude

14b:3	ödür	odur	edur
14b:3	axur	ahor	ahar
15a:1	öünēsü	oonesu	eonese
15a:1	xoyino	hoino	hoina
15b:1	oyiro	oiro	oira

これに関連して、『初学指南』のモンゴル語は、語順や句点の有無など微細な点で『三合語録』と異なり「トド文字一百条」と合致していることは注目に値する。例：

位置	「トド文字一百条」	『初学指南』	『三合語録』
14b:3	ナシ	ナシ	ugei yeo
15a:2	ナシ	ナシ	ge=ku bai=tugai
15a:3	ungši=xu	ungsi=hü	umsi=hü
15b:1	törin.	torin.	torin
15b:2	sana=bala	sana=bala	sana=bele.
15b:2	yaǰara	gajara	gajar

これから、『初学指南』は『三合語録』とは別に制作された可能性が大きい。

『初学指南』と「トド文字一百条」との依存関係を明らかにする上で大きな手がかりとなるのは、『三合語録』の tarlang [46b:1]と『初学指南』の tariyalang という表記である。

満洲語	akū oho	manggi
日本語訳	亡くなった	後
『三合語録』	<u>tarlang-du</u> uda bolsan hoinu	
『初学指南』	<u>tariyalang-du eodebulsen</u> hoina	
漢語	百年	之後

満洲語と漢語に見るように、この語句(下線部)は「亡くなった」という意味である。オイラート文語で taralang は「天国」(Позднеев 1911, стр.186)、ödö bolxu は「亡くなる」(Позднеев 1911, стр.39)であることから、これに対応するオイラート文語は taralang-du ödö bolson xoyino 「天国に昇った後」のように推定することができる。『初学指南』では恐らく意味が分からないままに taralang 「天国」を tariyalang 「畑」と写し、ödö bolxu 「亡くなる」も eodebulsen という意味不明の表記になったものと考えられる。こうした『初学指南』の誤記・誤写は、元になるオイラート文語の存在を仮定しなくては説明できないものであり、これは『初学指南』が「トド文字一百条」に基づいて制作されたと考える有力な根拠とみなすことができる。

一方、『三合語録』の tarlang も、オイラート文語の taralang と比べると2番目の母音が脱落した「不完全な写し」となっているが、これも『三合語録』が「トド文字一百条」に基づいて制作されたと考える根拠とみなすことができる。

3. 『三合語録』と「トド文字一百条」の対応

ここでは、『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語と「トド文字一百条」のオイラート文語との緊密な関係を文法的語尾の対応によって確認した上で、両者の母音字の対応について考察する。

3. 1 文法的語尾の対応¹⁰⁾

3. 1. 1 名詞格語尾の対応(表1)

表1にみるように、『三合語録』の格語尾は、「トド文字一百条」の形と合致している。ほとんどの語尾が語幹と繋げて書かれる点も共通である。「トド文字一百条」の格語尾は、サンボードルジ・橋本勝(2005: 133-134)にみられるように、オイラート文語で一般的な形である。

表1 名詞格語尾の対応

格	『三合語録』		「トド文字一百条」		意味	語幹末字
	語尾	例	語尾	例		
属格	-yen	abagai-yen [03a:2]	-in	abayai-in	兄上の	母音字
	+iyen	jiliyen [20b:3]	+iyin	jiliyin	年の	n 以外の子音字
	+in	jilin [07a:1]		jiliyin	年の	
	+ai/+ei/+i	manai [15b:1]	+ai/+ei/+i	manai	我々の	n
kumunei [04b:1]		kümünei		人の		
teoni [12a:3]		töüni		彼の		
対格	+gi/+igi	ugegi [07b:2]	-gi/+yigi	üge-gi	～語を	母音字
		saraigi [18a:3]		sarayigi	月を	
	+iigi	taniigi [20a:1]	+iyigi	taniyigi	貴方達を	n 以外の子音字
	+uigi	ulusuigi [06b:1]	+uyigi	ulusuyigi	人々を	
+i	setgili [10a:2]	+i	sedgili	心を		
造格	+ar/+er	durar [20a:2]	+är/+är	durär	自由に	子音字
		juiler [05b:3]		jüyiler	どんなに	
	+gar/+ger/+goor	sanagar [18a:1]	+yär/+gēr/+your	sanäyär	一心に	母音字
uger [14a:1]		öüger		ここを		
		daragoor [05a:1]	daräyour	陸続と		
奪格	+asu/+esu	ahasu [02a:3]	+äsu/+ēsü	axäsu	兄から	
		nigenesu [17b:1]		nigenēsü	一から	
与位格	+du(-du)	cimadu [02b:2]	+du/-dü	čimadu	貴方に	母音字、n
		nigen-du [02a:2]		nigen-dü	一に	
	-tu	bicik-tu [09a:1]	-tu/-tü	bičiq-tü	本に	k(q)
共同格	+tai/+tei	tantai [19b:1]	-tai/+tei	tan-tai	貴方達と	
		nukuttei [06b:2]		nöküdtei	親友と	

(プラス「+」は語幹と繋げて書かれることを、ハイフン「-」は語幹から離して書かれることを表す)

表の中で、「トド文字一百条」の属格語尾 -in と +iyin に対して『三合語録』では -yen と +iyen とあるが、これは満洲語の正書法で「子音字 y と母音字 i とは結合しない¹¹⁾」という制限でこのように表記されたと考えられる。

3. 1. 2 動詞時制語尾の対応(表2)

『三合語録』の過去形語尾=laiは、「トド文字一百条」の中には現れないが、オイラート文語の「過去語尾-lai」と一致している¹²⁾。「トド文字一百条」に現れる語尾は、すべてサンボードルジ・橋本勝(2005: 169-170)等のオイラート文語文典に記載されている。

表2 動詞時制語尾の対応

時制	『三合語録』		「トド文字一百条」		意味
	語尾	例	語尾	例	
過去	=ba/=be	sur=ba [01b:2]	=ba	sur=ba	学んだ
	=ji	neme=ji [21b:1]	=ji	neme=ji	増えた
	=lai	gar=lai [32b:2]	【=lai】		出た
現在・未来	=na/=ne	šaha=na [10b:1]	=na	šaxa=na	近づく
	=nai/=nei	sur=nai [01a:1]	=nai/=nei	sur=nai	学ぶ
	=nam	gar=nam [18b:1]	=nam	yar=nam	出る

3. 1. 3 動詞副動詞語尾の対応(表3)

表3 動詞副動詞語尾の対応

機能	『三合語録』		「トド文字一百条」		意味
	語尾	例	語尾	例	
仮定	=hola/=kule	sana=hola [13b:1] tei=kule [04a:1]	=xula/=küle	sana=xula teyi=küle	思えば そうであれば
	=hana/=huna/=kune	sana=hana [05b:2] sur=huna [10a:3] kele=kune [17a:2]	=xana/=xuna/=küne	sana=xana sur=xuna kele=küne	思えば 学ぶなら 話すならば
	=honi/=kuni	hairala=honi [02b:3] cejile=kuni [17b:1]	=xuni/=küni	xayir la=xuni čejile=küni	慈しめば 暗唱すれば
	=bala/=bele	ungsi=bala [17b:3] kelelče=bele [06b:3]	=bala/=bele	ungši=bala kelelče=bele	読むなら 言うなら
限界	=tala/=tele/=tolo	bai=tala [05b:1] nibsire=tele [09a:1] bol=tolo [01b:2]	=tala/=tolo	bayi=tala ナシ bol=tolo	～なのに 非常に ～まで
護歩	=bacu/=baci/=beci	yaga=bacu [07a:1] kečurge=beči [20b:3] bol=baci [15b:3]	=ba ču/=boču	yaya=ba ču ナシ bol=boču	どうしても どうしても なっても
	=bacigi/=becigi	sonos=bacigi [18b:3] kele=becigi [18b:3]	=ba čigi/=be čigi	sonos=ba čigi kele=be čigi	聞いても 言っても
継続	=sar/=ser	sur=sar [11a:1] cejile=ser [09a:2]	=sār/-sēr	sur=sār čejile=sēr	学びながら 覚えながら
分離	=at/=ot/=ut	sur=at [21a:1] bol=ot [13b:2] tur=ut [10b:2]	=ad/=öd/=öd	sur=ād bol=öd tör=öd	学んで なって 生まれて
並列	=ji/=ci/=ju	kele=ji [04b:3] kur=ci [10a:3] ki=ju [18a:1]	=ji/=či	kele=ji kür=či ki=ji	話し 至り 作り
目的	=hai =ha/=ke	ungsi=hai [15b:3] ungsi=ha [17a:1] uje=ke [02a:2]	=xai =xā/=kē	ungš=xai ungši=xā ūje=kē	読むために 読むために 見るために

『三合語録』と「トド文字一百条」の語尾はここでもすべて合致している。「トド文字一百条」の語尾は、サンボードルジ・橋本勝(2005: 182-183)等、オイラート文語文典で確認できる形式である。

以上をまとめると、『三合語録』の文法的語尾の表記や語形は「トド文字一百条」の表記とほぼ完全に合致している。「トド文字一百条」の語尾の表記のほとんどは、オイラート文語文典で確認することができる。これにより、『三合語録』のモンゴル語は「トド文字一百条」のオイラート文語を満洲語の正書法にしたがって、満洲文字で表記しようとしたものと考えられる。

3. 2 母音字の対応(表4)

『三合語録』のモンゴル語の表記には、満洲文字の a、e、i、o、u、ü という6種類の母音字が用いられている。これらの母音字と「トド文字一百条」のトド文字の短母音字、また長母音の綴りとの対応をまとめると表4のとおりである。

表4 母音字の対応

『三合語録』	「トド文字一百条」	出現位置
a	a、ā	
e	e、ē	
i	i、iyi	
o	o、ō、ö	
u	ü、üü、ö	
	u	xu、yu 以外
	ö	語頭以外
ü	uu	
	u	xu、yu
	ö	語頭

『三合語録』のモンゴル語がオイラート文語を満洲文字で表記したものであるという仮定に立てば、満洲文字の6つの母音字によって、オイラート文語の a、e、i、o、u、ö、ü という7つの短母音、およびそれらに対応する長母音を表記している。

したがって、満洲文字で表記されない音や満洲文字で区別されない音の違いは、存在しなかった訳ではなく、それらは満洲文字の6種類の母音字によって、満洲文字の正書法にしたがって表記されているために表面に現れていないと考えられる。こうした対応にもとづき、満洲文字では区別されない音の存在や音の違いを推定することが可能である。

まとめ

本稿の結論としては次の3点を挙げるができる。

- (1) 『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語と「トド文字一百条」のオイラート文語は、語順、使用されている語彙、文法的語尾の綴りが細部に至るまでほぼ完全に対応しており、『三合語録』のモンゴル語は「トド文字一百条」に基づいて制作されたものとみなすことができる。

『三合語録』のモンゴル語は「トド文字一百条」のオイラート文語を満洲文字で写したもので、その「口語」の実体はオイラート文語である¹³⁾。

- (2) 『初学指南』も『三合語録』と同様に「トド文字一百条」のオイラート文語を満洲文字で表記したものであるが、『三合語録』が「トド文字一百条」のオイラート文語を忠実に満洲文字に写したのに対し、『初学指南』はオイラート文語や方言に特徴的な表現を内地のモンゴル人に分かりやすい表現に換えたものと考えられる。これが『初学指南』と『三合語録』のモンゴル語の違いとなっている。
- (3) 『蒙古翻訳一百条』は、満洲語の同じ原文から訳しているが、他のテキストと表現や語句の面で違いが大きい。これによって、他の3種類のテキストとは別に満洲語から独自にモンゴル文語に翻訳されたものとみなすことができる。

[注]

- 1) 富俊(1749~1834)は蒙古正黄旗人で、姓は卓特、字は松巖。清の乾隆、嘉慶、道光の3朝を通じて翻訳進士から内閣大学士まで昇進した。本文で取り上げる著作以外に、満洲語・漢語・モンゴル語の3言語対照辞典『三合便覧』(1780年序)、『科布多政務総冊』などが有名である。彼の経歴については『清史稿』(卷三百四十二、列傳一百二十九)や『清史列傳』(卷三十四)、『続碑傳集』(卷二)などに詳しい。
- 2) 『三合語録』の序文には「乾隆年間に智信という人が編纂した(乾隆年間、曾有智公諱信者、特編清語百條)」とある。嘉慶14(1809)年大西堂蔵版本重刻の『清文指要』は『tanggu meyen(一百条)』の満洲語に白話体漢文の対訳を付したものであり、同書の「序」は『tanggu meyen(一百条)』の「序」ともみなし得るが、そこには、満洲人として満洲語が分からないのは恥であり、是非とも学ばねばならないが、それには話し言葉から学ぶべきである。老人たちが話したことを百話集めて自分の弟たち子供たちに学ばせた。満洲語のめざすかなめ(指要)といふことができる。量が多く、書き写すのは困難なので版に刻した、とある。
- 3) 浦・伊東(1957)は、『tanggu meyen(一百条)』の解題と諸本の比較、全篇のローマ字転写および日本語訳である。。
- 4) 本稿では東洋文庫所蔵本を使用した。
- 5) 本稿では東京外国語大学附属図書館所蔵の再版本を使用した。
- 6) 德勒克(デレク)は、博爾濟吉特(ボルジギン)氏、巴林郡王璘沁の長子。乾隆21年(1756)、輔国公に封じられ、内廷や清字経館に勤め、乾隆48(1783)年に固山貝子、理藩院額外侍郎、国史館副總裁になる。乾隆59(1794)年に没した。つまり、彼は『三合語録』の序が書かれる35年前に没している。『清史稿』(卷一百六十六)、『國朝耆獻類徵初編』(附 固山貝子德勒克列傳 今襲輔国公)等を参照。
- 7) 黄・屈(1991、88頁)には、『翻訳蒙古一百条』二冊とある。それらは、満洲部門に保管されている第3冊と第4冊であり、他の第1冊と第2冊はモンゴル部門に保管されている。
- 8) 『蒙古托忒彙集』は孤本であるが、中国国家図書館と北京大学図書館にはその青焼き印画複製本が蔵されており、北京大学図書館所蔵本の表題は『托忒大字彙』となっている。本稿では北京大学図書館所蔵本を利用した。また、『蒙古托忒彙集』に関しては、春花(2006)、晓春(2006、2007)らの紹介と研究があるが、このオイラート文語テキストについての言及はない。
- 9) ローマ字転写は、それぞれ満洲文字(満、三、初)は Möllendorff(1892)、トド文字はサンボードルジ・橋本(2005)、モンゴル文語は栗林・呼日勒巴特(2006)の方式による。また、モンゴル語(托、三、初、蒙)では次のような補助的な記号を使っている：

「=」(イコール)：動詞語幹と活用語尾との境界。

「-」(ハイフン)：名詞類の語幹と分綴される曲用語尾との境界。

「_」(アンダスコア)：ひとつの語が分綴されている場合、その境界。

「γ」：母音字の前で点の無い<γ>。

- 10) 文法的語尾では、紙数の関係で名詞格語尾と動詞の時制語尾と副動詞語尾のみを取り上げる。
- 11) 河内良弘(1996 : 49)
- 12) サンボードルジ・橋本勝(2005 : 169)
- 13) 『三合語録』の序にある德勒克(デレク)に関する記述は、少なくとも『三合語録』の成立には無関係と考えざるを得ない。

〔参考文献〕

(欧文)

Wilhelm Grube, "Proben der mongolischen Umgangssprache", *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes*, XVIII(1904): 343-378; XIX(1905): 29-61; XXV(1911): 263-289.

John R. Krueger, *Materials for an Oirat-Mongolian to English Citation Dictionary*, The Mongolian Society, Part One(1978); Part Two(1984); Part Three(1984).

P. G. von Möllendorff, *A Manchu Grammar, with Analyzed Texts*, American Presbyterian Mission Press, 1892.

L. J. Nagy, "A contribution to the phonology of an unknown East-Mongolian dialect", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae(B)* 10, 1960, pp.269-294.

X. Лувсанбалдан, *Тод үсэг, түүний дурсгалууд*. БНМАУ Шинжлэх ухааны Академи Хэл зохиолын хүрээлэн, 1975.

A. Позднеев, *Калмыцко-русский словарь*, С. -Петербург, 1911.

(日本語)

浦廉一・伊東隆夫「TANGGŪ MEYEN(清話百条)の研究」『廣島大学文学部紀要』第12号、1957、75-277頁。

河内良弘『満洲語文語文典』京都大学学術出版会、1996。

栗林均・呼日勒巴特爾編『「御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑」モンゴル語配列対照語彙』東北大学東北アジア研究センター、2006。

(中国語)

春花「论《蒙古托忒汇集》的语言学价值」《卫拉特研究》2006年第1期、62-70頁。

黄潤華・屈六生編『全国滿文圖書資料聯合目錄』書目文献出版社、1991。

李桓『國朝耆獻類徵初編』明文書局、1966。

錢儀吉『統碑傳集』江蘇書局校刊、光緒十九年(1893)。

『清史列傳』上海中華書局、民国十七年(1928)。

趙爾巽等撰『清史稿』中華書局、1997。

(モンゴル語)

O. サンボードルジ・橋本勝『オイラト・モンゴル文語概説』大阪外国語大学、2005。

八省、区蒙古語文工作协作小组《蒙文和托忒蒙文》编写组编《蒙文和托忒蒙文》新疆人民出版社、1976。

晓春「从《蒙古托忒汇集》看满文切音(蒙文)《卫拉特研究》2006年第4期、88-93頁。

晓春「从《蒙古托忒文[ママ]汇集》看十九世纪蒙古语口语特征(蒙文)《语言与翻译》2007年第2期、3-9頁。